

人はできない。僕は絵本の書評なんかを読んでいると、「あ、この人は絵が読めないんだ」と思うことがあります。文章しか読んでないなと。

灰島…本当にそうですね。私の反省も含めて、文学系の人には、文字は熱心に読むけれども、絵の方は子どもに比べてはるかに読む力がないと思います。

松居…僕が二歳のころから、母はよく絵本を読んでくれました。「コードモノクニ」という絵雑誌です。母が読んでくれるから、僕は絵を隅から隅まで見ていた。耳で聞きながら絵を見てみると、絵が生き生きと語り出して、物語の世界がぐんぐん広がっていくんですよ。

その絵が物語を語っているか、語っていないかかっていうのはすぐに分かります。二、三歳の子どもでも分かります。灰島…二、三歳で？

松居…分かりますね。子どもたちはふだん、言葉というものを本当によく聞いています。そうすると絵本を読んでもらったときに、日常生活の言葉とは違う言葉が出てくるのがわかる。僕は北原白秋が好きで、すばらしい日本語だと思っています。それで北原白秋の言葉が伝わってくると、その感覚で絵を見るんですよ。

灰島…まさに言葉と絵と、両方が同時に入ってくるわけですね。

松居…そうすると、この童謡とこの絵とは合わないって

うのが、すぐに分かるんです。ぴたりと合っていることもあって、そういうときには、その絵が好きになる。僕は今でも、初期の「コードモノクニ」を見ると、パッと絵を見ただけで、誰が描いたか分かりますよ。

別に覚えさせられたのではなくて、母親が「たけいたけお」と言ったりするでしょ？ それを聞いて、「武井武雄」という画家の名前を覚えてしまう。幼稚園の頃にもう、かなり絵描きさんの名前を覚えていました。ところが僕が編集者になってからは、そういう高名な画家にお願いするとはしなかったんです。

「母の友」誕生

灰島…編集者になったというお話が出たところで、お話をそちらへ向けさせてください。

松居さんは、雑誌「母の友」を創刊され、それから『こどものとも』を創刊されました。これはみなさんが知りたと思うことだと思うのですが、非常にユニークな、一冊で一話という形の月刊絵本「こどものとも」というのは、いったいどういうふうに発想なされたんでしょうか？

松居…子どもの時の体験が、無意識のうちに働いたのではないかと思いますよ。子どもの本の出版社としての福音館書店の始まりは、今でもありますが、石川県の金沢の福音館という本屋です。一九一七年にカナダの宣教師が、文書